

Relay Essay

リレー・エッセイ Vol.52

「上下・左右・いまここ」隨想

中島 晴矢さん

現代美術家・ラッパー

突如2014年の初夏に美術評論家の福住廉氏から「丸木美術館で個展をやらないか?」と打診を受けた時、榎木野衣やChim↑Pomの仕事など



で《原爆の図》の、その存在と名前と図像程度は知っていたものの、しかし現物を見たことも無かった私が、其処で「反核・反戦をテーマに」作品を展示するなど、不相応だし畏れ多いと思った。その懸念は実際に生で《原爆の図》を見てよいよ大きくなり、その圧倒的な当事者性から成る凄惨な主題と壮絶な画面に慄然として震えた。翻って、私は?—この表象不可能性の前に立ち尽くした体験と、ポリティカルな事象を扱うことの自身への問い合わせが、個展「上下・左右・いまここ」の出発点にして根幹だった。

結果、同時開催のアンデパンダン「今日の反核反戦展」に対し“ノリつつ相対化する”ことを意図して制作を行い、女の子が軍への募金を募るアイロニカルなDMにはじまり、グラフィティ、ラップのMV、原爆ドームの映像、日の丸……などと好き放題やらせてもらえたのは、ひとえに丸木美術館の懐の深さであり、実行委員や観客の方の理解があったからであると、今になってしみじみと思う。

個展中には「反戦」展のスピンオフ企画やアーティスト・トークなども開かせてもらったが、やはり印象深いのは「反核反戦展」と共同のパフォーマンス・イベントだ。辺りになにもない東松山の辺境、日が落ちかかる頃合いに、放射性廃棄物ドラム缶とインダストリアル・ノイズの轟音が響き渡り、私のアジテート的なラップも相まって、パフォーマーや美術家や観客など関係なく、皆が(呼びかけ人・池田龍雄氏までが)身体を揺らす混沌—その空間に、私が綴った「上下! 首振って階級をシェイク! 左右! 腰揺らし両翼をブレイク! この現実は嘘も偽りもねえ! いまここ、いまここ」というリリックの一瞬の現出を覗た気がして、この展示をやれて良かったとひとり手応えを感じていたのだった。

日本を含む同盟国、核政策を容認する世論と核政策を抜本的に転換させることが今求められています。地球市民に課せられた緊急の課題でもあります。「核兵器の非人道性、反道徳性」に焦点を当てた運動を広げていきましょう。

『原爆の図』の存在と役割はますます大きくなっているといつても過言ではありません。丸木美術館はそれを支える土台です。今年の発展を願つてやみません。

(日本原水爆被害者団体協議会事務局長)

被爆七〇年 核廃絶への一歩を踏み出す年に 大きく広がるアメリカ展への賛同

昨年末、ウィーンで第三回核兵器の非人道的影響に関する国際会議が開かれ、NPT会議にむけて「核兵器の使用がもたらす人道上の被害を防ぐ唯一の保証は予防(核不使用)をおいて他にない」(オーストリアによる議長集約)という明確なメッセージが発せられた。『原爆の図』アメリカ展はこの国際社会の動きを文化の面から支えたいと思う。

に対しても人々を守ることはできない」という国際赤十字の発言を、日本代表が「悲観的すぎる」と批判したことである。守りようがなければ、「核攻撃を防止する他に方策はない、核兵器廃絶しかない。」(二〇〇七年広島レポート)しかし核使用を前提とした「核の傘」の下にある日本は、核の非人道性を少しでも小さく見せようとしたのだ。被爆国政府と

ないことは、この会議で「広島・長崎のように核攻撃

だが看過しえ得ないことを示している。総選挙の結果、安倍政権は改憲を現実にしようとしている。しかし安倍政権の基盤は脆弱である。自民党比例区の絶対投票率は有権者のわずか六分の一。九条を守れという国民の声は根強い。アメリカ展の取り組みを進める中で、平和といのちと暮らしを守ろうとする人々との新たなつながりが生まれている。賛同は既に一〇〇〇名以上、募金も七〇〇万を超えた。そこに再び戦争に向かつてはならないという思いをひしひしと感じる。それに応え、アメリカ展を成功させたい。皆様のご協力を

お願いします。

(丸木美術館代表理事・小寺隆幸)

*最新の賛同者名は美術館ホームページでご覧になります。賛同者と募金は六月まで継続して集め、賛同者名はアメリカでも紹介します。

*振込用紙を入れないチラシを作成しました。集会での配布など、ご協力をお願いします。必要部数を郵送します。事務局までご連絡を。